第20回

三遠南信ふるさと歌舞伎交流

豊橋大会

忠臣講釈　幕図　宅兵衛上使の段

大鹿歌舞伎保存会／長野県下伊那郡大鹿村

菅原伝授手習鑑　松王下屋敷の場

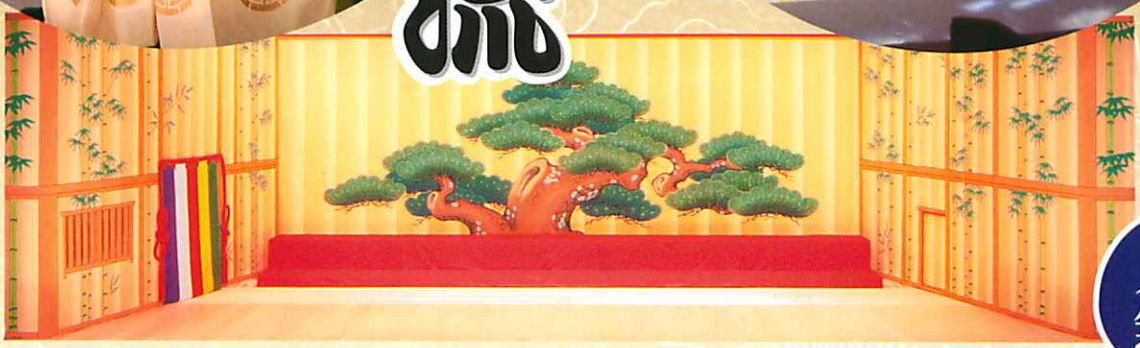
湖西歌舞伎保存会／静岡県湖西市

勧進帳

浦川歌舞伎保存会／静岡県浜松市

児模様曽我舘染　由比ヶ浜の場

豊橋素人歌舞伎保存会／愛知県豊橋市



入場無料

平成25年
11月17日日

午前10時開演
午前9時30分開場

穂の国とよはし芸術劇場 主ホール
豊橋市西小田原町123番地

主催●三遠南信ふるさと歌舞伎交流実行委員会
共催●豊橋市、湖西市、湖西市教育委員会、大鹿村、大鹿村教育委員会、浜松市
後援●愛知県、愛知県教育委員会、豊橋市教育委員会、公益財団法人豊橋文化振興財団

芸術文化振興基金助成事業

お問合せ先●豊橋市文化課　☎(0532)39-8820　〒440-0887　豊橋市西小田原町123番地

第20回 三遠南信ふるさと歌舞伎交流

豊橋大会

豊橋大会あらすじ

忠臣蔵釈幕図（ちゅうしんぐらしゃくまくず） 宅兵衛上使の段（たくべえじょうしだん）

大鹿歌舞伎保存会／長野県下伊那郡大鹿村

仮名手本忠臣蔵は、赤穂浪士の討入を描いた傑作で歌舞伎の三代名作の一つにも数えられ、寛延元年（1748）大阪竹本座で初演されるや爆発的なヒットを記録。類作もおびただしい数が作られ上演されています。その中の一つである太平記忠臣講釈は、『太平記』の世界に討入の物語を当てはめて脚色した近松半二、三好松洛等が書いた浄瑠璃で明和三年（1766）に竹本座で初演されています。今回上演する「幕図」はこれが原作となり大胆な脚色がされています。

舞台は、山科にある大星由良之助の館。鹿間宅兵衛と称して平右衛門がもぐりこんだ館に、妹のおかるが大星由良助の使いとして封箱を持って訪ねてきます。妹と対面した平右衛門は、封箱を奪いとり中身をあらためますが敵討ちのことは何も記されていません。由良之助に失望している平右衛門に、おかるは手紙をのぞき見た一件を話します。大事な手紙を見てしまったおかるは殺されても仕方ないところでしたが、身請けして親元に帰そうという由良之助の温情であったことを悟るのでした。平右衛門は、おかるに夫の勘平や親の与市兵衛の死を告げると、妹の命を犠牲にしようと刀を振り上げます。おかるの首を、顔世の首と偽って、吉良の屋敷へ潜入する腹なのです。この様子を奥で見ていたお石は、平右衛門の忠義に心を打たれ、近習格にとりたてて、討入の仲間に加わることを許すのでした。平右衛門は、おかるの首をいだきながら鎌倉へと旅立っていきます。

菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ） 松王下屋敷の場（まつおうしもやしきば）

湖西歌舞伎保存会／静岡県湖西市

菅丞相が藤原時平のざん言によって筑紫に流罪になった後、御台所園生の前は北嵯峨の庵室に隠れていたが、時平方の詮議は厳しく、追手が及ぶ。丞相の舎人松王丸は本心を偽り時平方に属していたが、御台の危急を知り、密かに自分の下屋敷にかくまった。そこへ時平家来の春藤玄蕃がのりこむ。訴人によって寺小屋を開いている武部源蔵が、丞相の一子菅秀才をかくまっていることが明らかになった。ついては、菅秀才の顔を知る唯一の人物松王丸に、武部のもとへ検分役として赴けと命ずる。松王女房千代は、驚いて早く若君をここへ迎えようと言いはったが、松王は若君もろとも園生の前も時平方に渡し、自分の栄達（出世）を計るのだと冷笑する。千代は夫の不忠不義をなじり、我が子の小太郎と自害しようとする。この心底を見定めた松王は初めて本心を明かし、討手が向かう前に小太郎を先回りさせ、秀才の身代わりとして源蔵に討たせようと悲痛な策を物語る。すでに死を決意した小太郎の健気な態度に松王夫婦は、悲嘆にくれながらも我が子の死出の旅路のしたくを整えるのであった。

勧進帳（かんじんちょう）

浦川歌舞伎保存会／静岡県浜松市

源頼朝の怒りをかった源義経が弁慶らを伴い北陸を通って奥州へ逃げる際の安宅の関（加賀国）での物語。

義経一行は武蔵坊弁慶を先頭に山伏の姿で通り抜けようとする。しかし関守の富樫左衛門の元には既に義経一行は山伏姿であるという情報が届いていた。焼失した東大寺再建のため勧進を行っていると弁慶が言うと、富樫は勧進帳を読んでみるよう命じる。弁慶はたまたま持っていた巻物を勧進帳であるかのように朗々と読み上げる。

なおも疑う富樫は山伏の心得や秘密の呪文についても問いただすが、弁慶は淀みなく答える。富樫は通行を許す。しかし、部下のひとりが義経に疑いをかけた。弁慶は主君の義経を杖で叩き、疑いを晴らす。危機を脱出した一行に富樫は失礼なことをしたと酒を勧め、弁慶は舞を披露する。踊りながら義経らを逃がし、弁慶は富樫に目礼し後を急ぎ追いかける。

児模様曽我館梁（ちごもようそがのたてぞめ） 由比ヶ浜の場（ゆいがはまば）

豊橋素人歌舞伎保存会／愛知県豊橋市

日本の史上に残る三大仇討は赤穂浪士が主君の仇吉良上野之介を討った元禄快挙と伊賀上野の鍵屋の辻で渡辺数馬が荒木又兵衛の助太刀で河合又五郎を討った伊賀の仇討、そして鎌倉時代富士の裾野で父の仇工藤佐衛門佑常を討った曽我の仇討である。

曽我兄弟は源頼朝の家臣河津三郎祐康と妻万江の子で幼名を河津一万、河津箱王と言った。親戚にあたる工藤佐衛門祐常は祐康と仲が悪く、頼朝公の慰安に催された相撲大会の帰りを待ち伏せして家来に申しつけ遠矢を以って祐康を射殺する。父親を殺された幼い兄弟は父の仇討を心に決め家来に武芸を習い勤しむのでした。母親の万江も幼い兄弟に本懐をとげさす為に曽我太郎祐信と再婚するのでした。祐信もこの兄弟に父祐康の仇を討たせようと考えていたのです。祐常は、この兄弟が成長して自分を狙うことを恐れ、頼朝公に曽我兄弟の祖父伊藤祐近が平家の味方をしたことを理由に、この兄弟も今のうちに断罪に処してしまうよう勧め、頼朝は梶原源太景季を正使に海老名軍蔵を副使に立て兄弟を由比ヶ浜に引出して打首にせよと命じるのでした。景季はこの兄弟に深い同情を寄せ頼朝に再三助命を請うが聞き入れられずやむなく兄弟を由比ヶ浜に引出し打首の刑を行うことになった。一万十才、箱王七才の幼い命が危うい所へ、祐康の親友であった畠山重忠が君を諌め赦免状を持って早馬にて駆けつけ、曽我兄弟の命は助かるのでした。そして十八年の艱難辛苦の末、富士の裾野の狩場で工藤佐衛門祐常を討ち取り本懐を達するのでした。